

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第12回）議事要旨

1. 日 時 平成25年6月6日（木曜日）14:00～16:00

2. 場 所 三田共用会議所 第3特別会議室

3. 出席者 （委員）

永井座長，有賀副座長，青柳委員，梶谷委員，北田委員，木下委員，佐藤委員，
里中委員，佐野委員，高鳥委員，成瀬委員，鉾井委員，三浦委員，矢島委員，
和田委員

（協力委員）

大石委員，小槻委員，西藤委員

（事務局）

文化庁：石野文化財部長，大和文化財鑑査官，江崎古墳壁画室長，榎本記念物
課長，内田文化財調査官，建石古墳壁画対策調査官，宇田川文化財調
査官，林文化財調査官ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：石崎副所長，岡田保存修復科学センター長，川野邊文化
遺産国際協力センター長，六川研究支援推進部長，早川
分析科学研究室長，早川主任研究員，犬塚主任研究員 ほか

奈良文化財研究所：上田研究支援推進部次長，玉田都城発掘調査部副部長，
田中研究支援推進部連携推進課長，平澤文化遺産部景観
研究室長，高妻埋蔵文化財センター保存修復科学研究室
長，中島文化遺産部主任研究員，降幡主任研究員 ほか

4. 概 要

（1）開会

（2）委員及び出席者紹介

（3）議事

①高松塚古墳壁画修理後の保存方針の検討について

事務局から資料2及び資料3に基づき説明があった後，次のとおり意見交換等が行われた。

北田委員：現地保存を前提にした検討の視点ということで説明があったが，是非個々の
問題だけ突出することなく進めてもらいたい。将来の現地保存に向けて，考
えられる課題や，必要な装置等といったことを含めた考え方をまとめてはど
うか。

和田委員：現在非常に良好な環境の下に修理作業が行われており，それがうまく完成，
終了したら，その良好な環境を石室の中にどのように確保して戻すかとい
うことが課題。もう一つは現地に戻した場合，人に見せるのか見せないのか，
見せない場合に壁画の状態をどのようにチェックし続けていくのか，更には
今後起こるであろう震災などに対してもどのように対応するかということ
を考える必要がある。

成瀬委員：劣化原因調査報告書で指摘されているように，高温多湿な我が国の文化財を
取り巻く環境下で，特に生物制御への対応策が現時点で無いのであれば，壁
画の現地保存は得策ではないと考える。墳丘にこれ以上手を加えないのであ
れば，カビ等の影響を受けない環境を確保するのは難しい。

北田委員：それらの問題がクリアできなければ現地保存できないということはそのとお
りだと思う。ただ，技術の発展は非常に著しいところがあり，それを期待し

た考え方というものも、本当に現地に戻すことに結論としてなるかどうかは別として、今の時点で考えておくことも必要だろう。

佐藤委員：できればかつての恒久保存方針のように、将来的には環境を確保して現地に戻して欲しいと思っている。科学はどんどん進歩するので、今の段階であきらめるのは早いと思っており、現地に戻す前に実験的な試みを行いながら、将来的に現地に戻す方法を模索すべきである。

木下委員：これ以上の墳丘の破壊は許されないのではないかという判断の中で、完全に環境を安定させるような施設を、墳丘を壊さない枠の中でどれだけできるかという問題がある。発掘調査で石室を取り出したときの空間と、当初の空調施設、墓道に当たる部分など、既に墳丘が失われている部分でどれだけのことができるかという具体的な実験を進めてみるということもあるのではないかな。

佐野委員：希望としては元の形に戻すのが理想だとは思いますが、壁画、墳丘、石室の保存というものを分けて考えるのが現実的なのではないかな。現在、壁画は修復作業中ではあるが、危機的な状況であり、石室に戻すことは壁画の保存・活用という面から問題があるのではないかな。墳丘自体もこれ以上の破壊はできないと考える。

西藤委員：壁画の絵本体の保存・修復措置にまだ着手していない中で、現地に戻すか戻さないかの議論は、10年を区切りとするのではなく、恒常的に行う必要があると思う。ただ、絵本体に何ら技術的なものも費やしていないし、保存対策もしていないのに、10年というめどの中でくくって良いのだろうかと思う。完成して戻すというのであれば分かるが、終わりが無いのに戻す、戻さないというのも、なかなか難しい話のように思えてならない。

北田委員：壁画が危機的な状況であるという認識は全く同じであるが、劣化させてしまったことも含めて、次の世代に対し、私たちの世代の責任というものがある。時間がかかっても、将来の現地保存に向けて研究し、良い方法を模索する姿勢を常に持つことが必要ではないかな。

和田委員：高松塚古墳壁画の保存に係る技術が、全国の装飾古墳の保存と活用にも活かしていけるものであると良い。

高鳥委員：確かに最終的には現地に戻すということは、当時議論されて保存方針として決定された。将来は分からないが、現状を知っておかないと、議論が前に進まないのではないかな。生物という観点では、現状では、現地保存する場合には、生物被害が進む可能性が強いと考える。現地に戻す場合、戻さない場合の問題点を整理してさらに議論してはどうか。

鉾井委員：湿度制御の観点からは、現状では現地保存は非常に難しいと考える。

矢島委員：例えば10年や15年という区切りを明確にして決定することは難しく、時間をかけざるを得ないし、時間をかけて検討することになると思う。その中で、現地に戻すことを最終目標としていただきたい。しかし、虎塚古墳などの経験からすると、地震等による亀裂が入った墳丘では、すき間から侵入する雨水や虫等についての対策をどうするかが問題となり、一方で墳丘の抜本的な再構築が選択肢としてあり得るかどうか問題。

梶谷委員：高松塚古墳の壁画は単体で国宝だと思うので、それを残すことを優先的に考えるべきである。ただ、そこで思考停止するのではなく、今まで壁画を修理する過程でいろいろ生まれてきた様々な研究が、キトラ古墳の修理などでも役立っていることから、それらを集めた学問というものが、この際形づくられると良いのではないかな。

三浦委員：高松塚古墳の場合は、発見されてからほとんど壁画が公開されなかったが、現在は年2回仮設修理施設で公開されている。これが非常に重要であり、高松塚古墳がいったいどういうものであるかがよく分かるようになった。石室

ごとに取り出した壁画が公開されるようになっている状況を踏まえ、現地保存とはどうあるべきかを考える必要がある。古墳の中に石室を戻すことだけが現地保存なのか。壁画も墳丘も保存しようとした場合の現地保存の在り方を考えることが大事なのではないか。

青柳委員：最初に考古学を習ったとき、発掘というものは非可逆性のものであると教わった。これは徹底的な原則で、発掘した時点で、オリジナリティは無くなっている。「現地」、「戻す」ということの意味を厳密に考えるべきではないか。現地に戻すと言うことが、本当に現地に戻るような印象を持ってしまいが、もう現地はない。墳丘はあるが、石室は解体して取り出している。一体性のある墳丘があって、版築があって、その中に石室があって、石材の上に壁画があるという本当のオリジナリティはもう無い。戻すと言っても、それはバーチャルの戻しであって、現地とは何か、戻すとは何かを厳密に考える必要があると思う。解体させた後であるにもかかわらず、本当に現地に戻るかのような錯覚に陥りながらここで議論しているのではないか。オリジナルなトータリティのある遺跡はもう無く、戻そうが何しようが、それは新たに作ることはないか。

里中委員：そもそも現地に戻すことを前提に言わなければならないような当時の雰囲気があったのではないか。何でも発見されたらその時点から劣化が促進されると思っている。発見されなくても自然状態の中でどんどん劣化していく。それが後の時代に開けてしまえば、どのような小さな穴でも空いた瞬間から劣化していく。劣化が進み、自然災害が防げないとわかっている中で、環境を確保したら現地に戻すという方針にとらわれる必要はない。むしろ、できるだけ劣化を進めない形での保存と、現状を再現できる施設が必要ではないか。

有賀副座長：文化財というものは、あるべきところで保存することが理想であり、そうでない場合が高松塚古墳壁画だと思う。現地に戻す、戻さないというのは、発掘する前に決めてやるべきことで、出した以上はこれから以下に保存して多くの人に見てもらって活用するかが重要だと思っている。高松塚古墳の壁画は掛け替えのない国宝でもあり、元に戻して駄目になったというのも後世に禍根を残すことになる。取り出した以上は、いかに良く保存し、活用するかという点が重要ではないか。

永井座長：今日一日で方針を決めてしまうというものではないため、更に議論を重ねていきたい。

森川委員：（書面・永井座長読み上げ）将来的には、国民の皆様に対して、文化財を活用しながら現地保存できる手法が見いだされることを期待している。そのような視点で議論を進めてもらいたい。

②高松塚古墳石室石材の調査について

事務局から資料4に基づき説明があった後、次のとおり意見交換等が行われた。

和田委員：石材は凝灰岩であり、差があると思うので、東壁の何枚目のブロックというような個単位で調査するのではなく、何点かで調べた方が良いのではないか。

高妻室長：外側からき裂が入っているのが見えるが、内部に対してどれぐらいの深さまでき裂があるのかということも含めて全体を見ていきたいと考えている。

永井座長：この調査の実施主体がどこになるのか教えて欲しい。

建石調査官：資料4は、奈良文化財研究所と東京文化財研究所を中心とした、普段から石材や壁画の調査をしているチームがあり、そのチームを中心として三村委員とも相談して作成している。実際の分析では三村委員をはじめとした専門家の方に御協力いただく予定である。

木下委員：石室石材の強度の問題だけではなく、構造物としての強度の問題を三村委員から指摘があったと思うが、耐力、強度の検討が必要ではないか。明日香村

には凝灰岩を使った横口式石槨があるが、その天井部分も完全にき裂が上から下まで広い範囲にわたって通っているものがある。もう少し周辺の関連の古墳等も視野に入れて検討してもらえると大変ありがたい。

建石調査官：周辺の古墳について具体的に分析できるかは難しいところもあると思うが、視野に入れていきたい。

永井座長：本日議論の中心になったテーマは、次回、次々回を含めて議論をしていき、どこかの段階で論点整理をしながら更にブラッシュアップした議論を展開していきたいと思っている。

③高松塚古墳壁画仮設修理施設及びキトラ古墳石室の一般公開（予定）について

事務局から、資料５に基づき高松塚古墳壁画仮設修理施設及びキトラ古墳石室の一般公開を、８月１８日から２５日までの８日間で行う予定であるとの報告があった。

（４）その他

事務局から、次回の検討会を９月１７日（火曜日）午前１０時から開催するとの報告があった。

（５）閉会

以 上